

コラム 「きのうきょう」

文&写真 学生記者 菅野誠一郎(法学部1年)

入学当初の心の温度を、お湯に例えて、90度としてみたい。「あれをしたい、これほしい」と活気に満ちている状態である。今、あなたの心は何度を指すだろうか。

90度と高い人がいれば、少し落ち着いて80度ぐらいの人もいるだろう。慣れや疲れから、さらに下がってぬるま湯ぐらいの人もいるかもしれない。一方で、新たな刺激を受け、100度近くで沸騰している人もいよう。そのような心の「沸き加減」を、私の趣味である茶の湯から考えてみたい。

「おもてなし」という言葉が表すように、茶の湯の目的は、客に一服の茶をふるまうことである。亭主は道具や茶菓子、懐石などに心を尽くす。亭主の心の内はすべての細部に表出し、一つの茶席を作り上げる。これは、炭で沸かすお湯とて同じである。熱い湯もぬるい湯も、亭主の心をそのまま表していることになる。

茶では、ぬるい湯は嫌われる。なによりもぬるい湯では、つまり、湯がたぎらなければ、おいしい茶を点てることができない。亭主の心の内と外は一致するから、ぬるい湯は、亭主の心がぬるいことを意味する。

侘び茶を完成させた千利休は、ぬるいことも、ぬるく見られることもひどく嫌った。熱い心が茶席に招く客や茶席を構成するすべてに正面から向き合うのだと言えばよいだろうか。「たぎる心」とは全力で人に物にぶつかっていくことである。

果たして、心を常にたぎらせ続けることができるだろうか。湯をグツグツと常に沸騰

させ続けられるだろうか。茶の湯において湯がよくたぎっているときは、釜が「松風の音」を鳴らす。「松風の音」が鳴るように工夫されているのである。

沸騰を続けると、湯は水蒸気になり、減る。そこで、点前の最後に、水指(水の入った器)から水を2杓釜へ返すと、それまで鳴り続けていた松風の音がピタリと止むのである。しばらくして、また鳴り始める。この場面をぜひ想像していただきたい。

一瞬の静寂の間、席中が「無」になるのだ。茶の湯における一つの山場である。客も亭主も無心になる。

全力で物事に対峙する「たぎる心」は、釜の中の湯のように沸騰している。釜の中の湯が減ると同様に、心の中の力も減る。ここで必要になるのが、釜に入れる「水」である。

「水」は心の沸騰を静め、自らを振り返る機会を与える。釜の中の湯が増えるように、心の活力も補給する。「水」は次に沸騰するため、つまり全力で物事に向かっていくために大切である。この「水」が何であるかは人それぞれに異なるだろう。

常に心をたぎらせ続けるように言うのは簡単だ。しかし、時に立ち止まることもなければ、それまでのことを見返すこともできず、しまいには活力をすべて使い果たしかねない。

「たぎる心」はもちろんのこと、その支えも同時に持っていたい。そう考えながら私の大学生活が始まった。

たぎる心

